

[体育・保健体育]

体育授業における言語活動の質を高める指導の工夫

— マット運動 (3年生) の授業実践から —

加藤 尚大*

1 はじめに

器械運動について、文科省は現行の学習指導要領で、「技を身に付けたり、新しい技に挑戦したりするときに楽しさや喜びを味わうことのできる運動である」⁶⁾と記している。しかしその反面、「日常生活では通常行われない動きを含んだ運動を行うことが特徴」とも記している。非日常的な動きや姿勢に対して恐怖心を抱く子供も少なくない。また、個々の技能の完成度が明らかになることに抵抗感がある子もいる。その結果、器械運動の授業に積極的に取り組む子とそうでない子の二極化が懸念される。「運動する子供とそうでない子供の二極化傾向」⁷⁾は、次期学習指導要領の中でも課題に上げている。そんな器械運動の授業の中で私は、子供の技能向上に向けて様々な練習法を示したり、子供一人一人にアドバイスや補助をしたりし、器械運動を得意とする子もそうでない子にも最善を尽くしてきたつもりだった。しかし、思うように子供の技能は向上せず、歯がゆい思いをしてきた。教師主導では、時間が足りなかったり、技のコツを上手く子供に伝えられなかったり、子供が受け身の姿勢になったりしてしまっていた。そこで、教師主導ではなく、子供自身が目的意識をもって主体的に活動したり、子供同士がかかわり合ったりしながら技のコツの理解や技能を獲得していくような授業を展開したいと考えた。

次期学習指導要領の方向性として、これからの子供たちに求められる資質・能力に「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱が説かれている⁵⁾。これらを身に付けるための過程として中教審答申では、「子供たちが、主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を結び付けたり、多様な人との対話を通じて考えを広げたりしていることが重要である。また、単に知識を記憶する学びにとどまらず、身に付けた資質・能力が様々な課題の対応に生かせることを実感できるような、学びの深まりも重要になる」と記している。これを器械運動に置き換えると、技能の向上はもちろん、問題を解決・発見しようと深く考える思考力の向上も期待できる。主体的・対話的で深い学びは、まさに私が求めていた授業スタイルである。そこで、子供が主体的・対話的に学ぶことに重点を置いたマット運動の授業を実践しようと考えた。

ところで、この「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて水原は、「言語活動は、思考力・判断力・表現力を育む源となり、主体的な態度形成に貢献する」³⁾と述べている。先行研究に「言語活動」に関する興味深い実践があった。それは、真野の研究で技のつまずきと指導のポイントを局面毎に記した「アドバイス言語一覧表」を活用するものである。教師は、その表を活用したことで、「児童独自のアドバイス言語が生まれ、技ができる感覚を伝え合う場面も見られ、児童の関わりも深め、協働して学習する楽しさを感じることができた」²⁾と記している。私は、この「児童独自のアドバイス言語」は、技能向上に向けて子供にとって最もイメージしやすい言語であると感じた。そこで、本実践はこのアドバイスとなる言語活動の質を高めるための方策を考え、子供の学びを深めていけることを期待する。

2 研究の目的

子供同士の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた「言語活動」の質を高めるための指導を工夫し、マット運動の技能向上に有効であるか検証する。

3 授業の計画

- (1) 実施期間 平成29年8月30日～平成29年9月11日
- (2) 単元名 小学校3学年「器械運動(マット運動)」

* 柏崎市立比角小学校

(3) 対象児童 男子21名 女子14名 計35名

(4) 単元展開の構想

① アドバイスシートの活用

グループ同士でアドバイスとなる言葉を考えさせ、課題意識を高める。また、それを付箋に書き、一連の動作が描いてある紙に貼り、可視化していく。これを、子供同士で作成した「アドバイスシート」と呼ぶ(図1)。

② クッションタイムによるふり返り

授業の合間の時間をクッションタイムとする。アドバイスシートに貼られた付箋を、授業後の休み時間等に確認できるように教室に掲示する。授業で拡散された付箋を教師がポイント毎に分けて整理する。このアドバイスシートを、技の修正の参考にしたり、アドバイスの語彙を増やしたりすることに活用する(図2)。

③ ICTの活用

ア…プロジェクターによる成功例と失敗例の比較

技の成功例と失敗例の映像を見せる。この2つの映像を比較させ、違いを見つけ出し、技のポイントを確認する。ポイントを定めることによって、子供の視点を明確にする。

イ…タブレットによる自己の動きの確認

グループ(3~4人)で1台のタブレットを活用し、自分やグループの技の動作を確認する。自分の動作を客観視することで、グループのアドバイスに効果が生まれることを期待する(図3)。

ウ…プロジェクターとタブレットで動作を比較

自分の動作と成功例の動作を比較させて、技のポイントを中心に修正点(アドバイス)を見付ける(図5)。

(5) 単元の指導計画

授業は、基本的な技(①前転②後転③壁のぼり倒立④壁倒立)の練習を中心に構成する。主活動の「言語活動」では、子供が見通しをもてるように毎時間同じ流れで進めるようにする。また、次の四つの手立てを計画した。

表1 単元計画(全6時間)

	1	2	3	4	5	6
学習内容 <めあて> 0	・オリエンテーショングループで技が成功するポイントを見つけよう。 →練習 <前転>	グループで技が成功するポイントを見つけよう。 →練習 <後転>	グループで技が成功するポイントを見つけよう。 →練習 <壁のぼり倒立>	グループで技が成功するポイントを見つけよう。 →練習 <壁倒立>	グループで互いにアドバイスし合おう。	グループ毎に発表会をしよう。良かったところを伝えよう。
10	・本時の流れ・めあて確認・準備運動、補助運動					
20	学習の説明 ①前転 1 映像を視聴してポイントを見つける。 2 付箋にアドバイスを書いてシートに貼る。	①練習 ②後転 1 映像を視聴してポイントを見つける。 2 付箋にアドバイスを書いてシートに貼る。	①, ②練習 ③壁のぼり倒立 1 映像を視聴してポイントを見つける。 2 付箋にアドバイスを書いてシートに貼る。	①, ②, ③練習 ④壁倒立(倒立) 1 映像を視聴してポイントを見つける。 2 付箋にアドバイスを書いてシートに貼る。	①, ②, ③, ④の練習	①, ②, ③, ④の練習 発表会にむけた練習
40					発表会にむけた練習 ・発表にむけた並び方ややり方を話し合い考える。 →練習する。	発表会 (1グループ30秒) 他のグループの良かったところを見つけて伝えよう。
45	ふり返り・片付け					

クッションタイム・・・アドバイスシートによる言語や動作の学び

◆技の成功例・失敗例の映像を視聴してポイントを見つける。

繰り返し見せる中で、子供が「もっとここをこうすればよい」と感じられるようにする。「どこを」や「どんなふうに」など、子供が動作を焦点化させられるよう見るポイントを示す。

◆付箋にアドバイスを書いてシートに貼る。

例えば、前転であれば、「頭の着き方がおかしいから、もっと頭の後ろを床に着くといい」、「おへそを見て頭をつくといい」など、具体的なアドバイスとなる言葉を書けるようにする。子供の多様な考えをアドバイスシートのポイントに当たる部分に貼っていく。

◆アドバイスシート、タブレットを活用する。

アドバイスシートを見て「感じ」や「イメージ」を膨らませ、気づきが生まれるようにする。また、アドバイスするための言葉を探す手がかりとして活用できるようにする。

タブレットで動作の映像を見せながらアドバイスをすることで、自分の動作を確認できるようにする。また、成功例の映像と自分の動作を比較しながらアドバイスができるようにし、よりポイントを明確にして動作の確認ができるようにする。

◆クッションタイムで活用する。

「アドバイスシート」を見て、自分の技の修正に活用する。また、アドバイスをするための語彙を増やすことで、より効果的なアドバイスができるようにする。

4 アドバイスの質を高めていく授業の実際

① 1時間目<前転>

前転は、授業前から32人（91%）が「できる」という感覚をもって臨んだ。よって、「きれいな前転をグループのみんなができるようにしましょう」とめあてを立て、単に回れるだけでなく、頭の着き方、滑らかな回転、回った後の着地の仕方などが、よりきれいな前転を目指せるようにしたいと考えた。

始めに、成功例と失敗例を見せて違いを見付けられるようにした。子供たちは、失敗例を見てすぐに「頭の着いている場所が違う」「回った時に止まっている」など、動作の違いに気付くことができた。そこで、付箋にアドバイスとなる言葉がけを書かせた。すると、「頭のとっぺんがついている」「背中が地面についている時間が長い」など、見た気付きをそのまま言葉にして付箋に書いている子供が多かった。アドバイスシートには、多くの付箋が貼られ、子供の意欲が伝わったが、その内容は予想以上に乏しかった。また、付箋が多すぎて、どれをアドバイスとして見ていけばよいか子供の中で困惑した。

授業後のふり返りを見ると、アドバイスのおかげで上手に回れたという子供もいたが、達成感を味わった子供は少なかった。その原因に、付箋に書かれた言葉が、アドバイスとして有効に活用されなかったこと、アドバイスを受けても子供が技に変容を体感できなかったことが考えられる。よってアドバイスの質をより高められるような手立てが必要であると考えた。一方、アドバイスシートに貼られた付箋を整理してみると、子供がどのポイントに着目していたかがよく分かった（図1）。そして、整理したシートを教室に掲示すると、休み時間に興味深く見る子供が多くいた（図2）。

② 2時間目<後転>

後転は、授業前から26人（74%）が「できる」という感覚をもっていった。授業の流れは、1時間目と同じ流れであったため、子供はスムーズに活動できた。

前転と同様の流れで授業を進めたが、付箋にアドバイスを書く際に、「～だった。」ではなく「～するといいよ。」と具体例を挙げてから書くように指示した。

アドバイスとなる付箋には、「もっと足を曲げたほうがいいよ」や

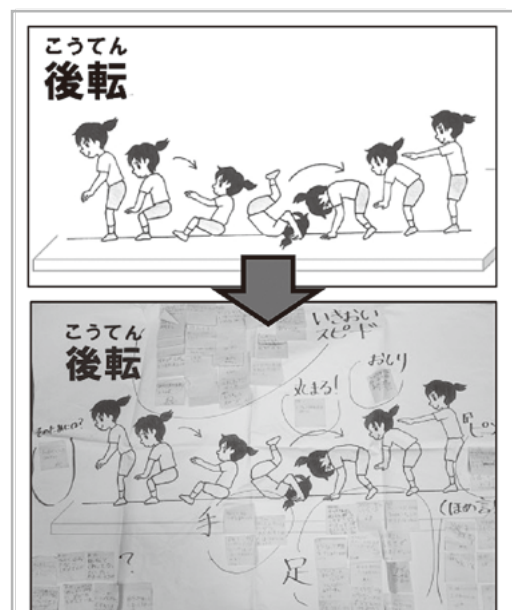


図1 アドバイスシート

「手に力を入れるといいよ」など、実際に参考になる言葉として活用されるようになった。そして、グループで見せ合ったり話し合ったりする場も増えた。また、タブレットの使用にも徐々に慣れる子供が増えたことで、動作を繰り返し見て練習する子供が増えてきた(図3)。しかし、アドバイスを受けても、それをすぐに改善できた子供は少なかった。

授業後のふり返りでは、まず、タブレットを使用について「自分の動きが分かってよかった」「タブレットで自分の動きを見ながらアドバイスをしてもらったからよく分かった」など、タブレット使用の効果を感じた子供が多かった。しかし、具体的なアドバイスの言葉によって効果を感じた子供は、ふり返りカードからは見取れなかった。

③ 3時間目<壁のぼり倒立>

壁のぼり倒立は、初めて挑戦する子供が多かった。この時間では、アドバイスとなる言葉の形式を広げ、よりイメージをもって取り組めるように「〇〇を△△みたいにするといいよ。」(例え)や「スーっと」「グッと」(音)といった言葉でアドバイスができるよう指示した。すると、成功例と失敗例を見た時点で、「もっと手にグッと力を入れたほうがよい」「ひじをピンツとした方がよい」などと付箋に書いていた。

ふり返りでは、初めて挑戦する子供が多かったにも関わらず、「〇〇さんに、『電信柱のように体をまっすぐにしたほうがよい』と言われてもらってできるようになった」とふり返り、達成感を味わった子供がいた。また、「〇〇さんに、足をピンとしたほうがよいよ」とアドバイスをしたらよくなっていたとふり返る子供もいた(図4)。例えや音を伝えることで、子供は、イメージしたものを体で表現しやすくなったものと思われる。

④ 4時間目<壁倒立>

壁倒立は、単元前のアンケートから子供が最もできるようになりたい技であると分かった。これまでと同様に、付箋を基にしたアドバイスを参考に、練習に取り組んでいた。しかし、アドバイスによってイメージはもてるものの、なかなか体現できない子供が多かった。いくらアドバイスがあっても恐怖心があったり、感覚を掴めなかったりする子供が多かったように感じた。しかし、できるようになりたいという意欲をもって、繰り返しプロジェクターとタブレットで動作を比較したり(図5)、技に挑戦したりする子供が多かった。結果的に、この1時間で、壁倒立ができるようになった子供は2人であった。この2人に、友達からどんなアドバイスをしてもらったかと聞くと、「手をもっと壁の近くに置くといいよ」や「足を上げる時の勢いをもっとつけるといいよ」であった。1時間目に比べ、アドバイスが具体的かつ効果的であったと思われる。

ふり返りでは、「どこが悪いか分かったけれど、できなかった」という子供が数名いた。しかし、「できなかったけれど、アドバイスはできてよかった」や「友達にアドバイスをしてもらったから頑張れ



図2 クッションタイムにアドバイスシートを確認する子供の様子



図3 技を撮影する子供とアドバイスを確認する子供の様子

〇友だちへアドバイス		
名前	アドバイス	かわったこと
さんに	ヤメリのようじ 動くいいと思えたら	できた
さんに		と書いたら

〇友だちからアドバイス		
名前	アドバイス	かわったこと、できたこと
さんに	足をピンツ するいいよ	よくなっていた
		と書いたら

図4 ふり返りカード



図5 成功例と自分達の動作を比べている子供の様子

た」という子供もいた。できる・できないに捉われず、グループで一緒に活動することで、子供の意欲はより高まったのではないかと考える。

5 考察

(1) アンケート結果

単元の前後に、学級の子供（35名）に授業に関するアンケートを行った。結果を表2に示す。最も上昇した内容は、「友達とアドバイスをし合う時に自分の考えや思いを言える」であった。単元前は、技に対して自信がある子供がそうでない子供へアドバイスをするという傾向が見られた。しかし、教師が「技ができることと、技を見てアドバイスしてあげることは同じくらいすごいこと」と子供に声を掛け、技の優劣に関係なくアドバイスをした子供を褒めたり、学級全体で取り上げたりしたことで子供にとっての自信となり、このような結果が生まれた。また、アドバイスシートの活用によって、付箋を手掛かりにして誰もが容易にアドバイスができるようになった。

最も下降した内容は、「友達とアドバイスをし合うことは好きである」であった。この原因に、アドバイスをし合っても技に変容が見られなかったことが考えられる。特に、4時間目の授業で壁倒立を行った際に、アドバイスが有効に働かなかったことが挙げられる。

表2 アドバイスに関するアンケート

質問内容	肯定的評価 (%)		
	単元前	単元後	変化
1 友達にアドバイスができる。	77	82	+ 5
2 友達からアドバイスをしてもらったことがある。	65	77	+ 12
3 友達からアドバイスをしてもらってよかったことがある。	82	80	- 2
4 友達とアドバイスをし合う時に自分の考えや思いを言える。	65	85	+ 20
5 友達とアドバイスをし合うことは好きである。	94	88	- 6
6 友達とアドバイスをし合う体育は楽しいと思う。	94	94	0
7 友達とアドバイスをし合うことで、運動ができるようになると思う。	91	91	0

(2) 子供のふり返りの記述

単元のふり返りにおいて、対象児童35名に「友達からのアドバイスについて振り返ろう」と指示し、授業の感想を書かせたところ、表3のような記述がなされた。

表3 アドバイスを取り入れた体育授業のふり返り（抜粋）

○壁登り倒立ができなかったけれど○○さんに、「手と手の間を短くするといいよ」や□□さんに、「ひざをピーンと伸ばすといいよ」とアドバイスをもらったからできるようになった。
○後転で、アドバイスをもらったけれど上手くできなかった。でも、前よりもできるようになりたいと思った。友達と話し合ったからそう思えた。
○タブレットで体の動きを見たから、どんどん上手くなったのが分かって嬉しかった。
○タブレットがあったから、みんなで見ながらアドバイスができた。
○最初はグループが1つにまとまらなかったけれど、技ができるようになったら少しずつ話し合えるようになった。
○アドバイスをし合いながらやると上手になったし、できるようになったらマット運動が楽しくなった。
○壁のぼり倒立で○○さんに、「手を動かしていくといいよ」と言ってもらったけど怖くてできなかった。
○後転でもう少し勢いをつければよいことは分かったけどできなかった。
○壁倒立で、肘を伸ばせば良いことは分かったけどできなかった。
○壁倒立で、成功例の映像とタブレットの自分の動作を比べて、ちがいは分かったけどできなかった。

「アドバイスによってできた」と実感した子供は、具体的なアドバイスの言葉を挙げて感想を記述していた。アドバイスの言葉が心に残るほど、嬉しさや達成感を味わえたことが分かる。また、技ができなくても友達と話し合ったことで意欲が高まった子供もいた。さらに、このふり返りで最も多くの子供がタブレットの良さを実感していたことが分

かった。今回の授業実践をするにあたって、小学3年生にタブレットの使用は難しいのではないかと考えていたが、ほとんどの子供が撮影、再生、一時停止といった操作ができた。そして、グループで集まって興味深く、自分やグループの動作を確認する姿は印象的だった。そして、このタブレットを見ている時が最もアドバイスが活発に働いていた。しかし、「〇〇すればいいことは分かっているけどできなかった」という子供が数人いた。このことから、子供によるアドバイスには、技の難易度によって限界があったと言えよう。

(3) まとめ

子供同士のアドバイスを主とした言語活動は、技能向上に向けて学習意欲を高めている傾向にあった。成功例の映像を観て気付いたポイントをアドバイスするだけでなく、付箋に書いたアドバイスを「アドバイスシート」に貼り、クッションタイムで確認することでアドバイスとなる語彙が増え、より言語活動が活発化したと思われる。また、アドバイスをするためには、必然的に子供同士が互いの動作をよく見なければならぬ。そのために、タブレットによる映像を繰り返し見たり、成功例の映像と自分の動作を見比べたりすることが有効的に活用された。

しかし、アドバイスによって基本的な技能の向上は期待できるが、技の難易度が上がると子供同士のアドバイスは有効に働かないことも教師の観察や子供の振り返りから明らかとなった。そこで、技の難易度が上がった場合は、教師が子供の意欲を喚起するようなスモールステップの練習法を提示したり、教師がアドバイスをしたりすることも必要であったと考えられる。

6 おわりに

本研究の目的は、言語活動の質を高めるための指導を工夫することが、マット運動の技能向上に有効であるかを明らかにすることであった。

アドバイスシートの活用を中心とした言語活動によって、技能向上に向けた活動が促進され学習意欲が高まることが明らかとなった。しかし、子供同士のアドバイスには技能向上に向けて限界があることも明らかになった。子供の運動技能の向上を目指したスモールステップによる練習方法を研究すること、教師による動きの個別指導を充実させいくことが今後の課題である。また、マット運動に限らず、他の種目や領域においても子供同士の言語活動が、技能向上に向けた活動の促進に有効であるかも明らかにしていきたい。

[引用・参考文献]

- 1) 中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」2016
- 2) 真野昌樹「体育を軸に「学び合い高め合う」生徒の育成－小中連携によるカリキュラム開発「器械運動（マット運動）」－愛知教育大学教育実践研究科（教職大学院），2015，p.357
- 3) 水原克敏「新小学校学習指導要領改訂のポイント」日本標準，2017，p.19
- 4) 文部科学省「学校体育実技指導資料第10集 器械運動指導の手引」東洋館出版，2015
- 5) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 総則（平成29年6月）」2017，pp.35-40
- 6) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 体育編（平成20年8月）」東洋館出版，2008，p.15
- 7) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 体育編（平成29年7月）」2017，p.6
- 8) 文部科学省「小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック 中学年」2011